

三島由紀夫「奔馬」

——二人の「行為者」が担う役目——

田中 あゆみ

「奔馬」は、「新潮」昭和42年2月号から昭和43年8月号に掲載され、昭和44年2月に、単行本「奔馬」として、新潮社より初めて刊行された『豊饒の海』第一巻にあたる作品である。

本作は英雄に憧れた一人の右翼少年の決起から自決までが作品の主軸として書かれており、幼馴染の男女の禁忌の恋愛が主題であった第一巻「春の雪」とは対照的な武骨な手触りを持った当時の時代性が色濃く反映された作品となっている。

本作の主人公である飯沼勲は、「神風連史話」に出てくる神風連の英雄に心酔し、いずれは神風連の英雄達のように国のために決起することを夢見る青年であり、後に第三巻「暁の寺」のヒロイン月光姫（ジン・ジャン）に転生する人物でもある。

ここで重要な問題がある。なぜ、「奔馬」と「暁の寺」では男から女という性質そのものが異なる生き物に転生するに至ったのかということだ。「暁の寺」では勲の転生のジン・ジャンは主人公ではなく、準主役という立場で書かれる。『豊饒の海』四部作を起承転結で分けるならば、「奔馬」は承、「暁の寺」は転であろうが、男から女に転生させたというのは、主人公の交代という事態まで引き起こしている。これは、作品に

大きな波紋を広げる由々しき事態である。なぜ、男から女に転生させる必要があったのだろうか。

そして、本作にはもう一人、本多繁邦という重要な人物が登場する。本多は『豊饒の海』全巻を通して輪廻転生の神秘を見守り、「暁の寺」ではジン・ジャンに転生した勲に代わり主人公の役目を受け持っている。なぜ本多を主人公にしなければならなかったのか。彼はそれだけの資質を持った人間なのだろうか。

そこで、本文では、飯沼勲と本多繁邦の二人を「行為者」として配置し、どのような「行為」が鍵に繋がるかを紐解いていく。実際に決起を起こす勲と、一見彼を見守る「傍観者」の印象を与える本多を同じ土俵に置くのは筋違いに思われるだろうが、二つの謎について考えるために今回は敢えてそのように位置づける必要がある。二人の「行為者」になるまでの過程を前半、「行為者」になった後の行方を後半に分けて考えていく。

第一部 行為者になるまでの過程

「純粹」に拘る男

飯沼勲という人物は今までの先行研究から見ていくと研究者によって意見は幾つか分かれる。

まず、佐藤秀明¹⁾は勲に著者の三島が本質的に持たなかった行動家の体質があると指摘し、「忠義」と「純粹」を信じ、それだけで行動に移れる人物²⁾だったと見ている。一方、マルグリット・ユルスナールの³⁾ように佐藤とは反対に著書で本作の最後の部分を指摘しながら、「結局、自分が死ぬ前にただ一人、すぐ涙を浮かべる感傷的な老人の裏面に、恐るべき強欲な資本家の本性をかくしている蔵原だけしか殺すことができなかった。この計画とこの犯罪によって、勲はたしかに正真正銘のテロリストにはなったであろうが、それでもなお西欧のファシストとのあいだには千里の怪底がある」と勲の行動を否定する意見も存在する。たしかにユルスナールの意見は一理あるが、勲の桑原暗殺の動機は右翼主義のテロリストそのもので、結束主義や軍国主義を信奉するファシストとは異なるものだ。ファシストに繋げるには些か強引といえよう。

井上隆史³⁾は、先の二人に対して勲の内面の影に着目し、松枝清頭や本多と同様に「内面の荒廃、枯渇、冷却、貧困化、死に犯されたものとして造型されている」人物としている。清頭や本多とは性格は違うが、勲も自身の理想を実現させるための死を望んでいるので、「死に犯されたもの」という立場では同類の存在であるという見方は可能だ。

これらの論から見ていくと、勲という人物は「行為者」という見方は共通している。これらの先行研究の意見を踏まえながらも少し詳しく勲という人物について見てみよう。

飯沼勲は、「春の雪」に登場した元清頭付きの書生で現在は靖献塾の塾頭飯沼茂之と松枝侯爵の愛人であった女中みねとの間に生まれた一人息子だ。「奔馬」に登場する時点では数えて十九歳。大学生で剣道を志す右翼青年で、新興華族の子息だった松枝清頭とは身分の上で隔たりがある。容姿に関しても、清頭が周囲に不吉さすら感じさせる美貌だったのに対し、「飯沼の面影を宿してはるるが、あの濁った、重い、鬱した線を、ひとつひとつ明快に彫り直して、軽さと鋭さを加へたといふ趣がある(四)」としており、決して美貌というわけではない。

しかし、精神面においては、前世である清頭の名残を色濃く残している。清頭が「優雅」をアイデンティティとしていたように、勲にも「純粹」という確固たる理想があった。

勲の「純粹」は、何に関しても「純粹」であれというものではない。作中で勲は「純粹に死ぬ」といふことはむしろ容易く思はれたが、たとへば純粹で一貫しやうとすると、「純粹に笑ふ」といふことはどういふことだらう(十)」と思ひ悩み、「さふいふ笑ひを人に見られたくなかつた(十)」と日常の行為においての「純粹」はむしろ恥じている。勲の行動における屈折した部分は、清頭の屈折した性格を継承している。勲にとっての「純粹」とは次のように考えていた。

純粹とは、花のような観念、薄荷のよく利かした含嗽薬の味のよ
うな観念、やさしい母の胸にすがりつくような観念を、ただちに、
血の観念、不正を薙ぎ倒す刀の観念、袈裟がけに斬り下げると同時

に飛び散る血しぶきの観念、あるいは切腹の観念に結びつけるものだった。(十)

勲の「純粹」というのは「切腹の観念」と切っても切れないものだった。現代の観念では、切腹と「純粹」を結び付ける思考は結び付かないものだが、本作の時代設定の昭和七(一九三二)年は、前年に日本の軍部によって引き起こされた二・二六事件、五・一五事件をきっかけに軍国主義に傾き始めた時期だった。三谷太一郎は、この年を境に「日本と世界にとっての第一次大戦の「戦後」は終わるのです」とし、「従来日本においては傍流ないし底流に止まっていた「地域主義」が、外国の事例をモデルとしながら、俄然時代の本流に転ずることになった」と軍部が起こした国の内部事情の変化について指摘している。「軍部」によるクーデターは、それまでの「戦後」の穏やかな空気に深く亀裂をもたらしたのである。

そして、二・二六事件は三島の人生観にも、大きな影響をもたらした。三島は二・二六事件当時の自身の状況を次のように振り返っている。

その雪の日、少年たちは取り残され、閑却され、無視されていた。少年たちが参加すべきどんな行為もなく、大人たちに護られて、ただ遠い血と硝煙の匂いに、感じ易い鼻をびくつかせていた。悲劇の起った邸の庭の、一匹の仔犬のように。

少年たちはかくてその不如意な年齢によって、事件から完全に拒まれていた。拒まれていたことが、却ってわれわれに、その宴会の壮麗さをこの世ならぬものに創造させ、その悲劇の客人たちを、異常に美しく空想させたのかもしれない。

「二・二六事件と私」

事件当時の三島はまだ十一歳、大人たちの庇護が必要な少年だった。大人たちの庇護を受け事件から隔離された状況では、事件の内容は想像するしかない。しかし、想像するしかないからこそ、三島は決起した青年将校たちに美しさを、そして、夢を見出すことができたのであろう。「純粹」に夢を見る「行為」というのは、その出来事から完全に隔てられてこそ見ることが出来るものである事を勲の「純粹に死ぬ」という理想からは見出すことができるのだ。勲の神風連の英雄達のように国のために「純粹」に死ぬという理想には、当時の世相と三島の二・二六事件への憧憬が色濃く反映されている。戦いによる死はまだ遠い出来事ではなかった。

しかし、勲の「純粹」に死ぬという理想は、後にある「行為」によって大きく変容していく。勲のアイデンティティを壊したある「行為」とはどのようなものであろうか。

転生との出会い

勲のある「行為」について考えていく前に、もう一人の「行為者」である本多繁邦について考えていく。

本多は冒頭で少し述べたが、作中の後半まで勲のような大きな行動を起こすことはなく、一見「傍観者」の立ち位置である。しかし、本多の「行為」は控えめだが作中で大きな役目を担っている。作品における本多の役割について濫澤龍彦は次のように評している。

小説の中の副主人公にすぎないけれども、単なる狂言回しというにはあまりに主人公に密着しすぎており、おそらく小説の最後まで、次々と転生する主人公の一回性の行動を見守ってゆくところの、認識の人であり、目のひとでありつづけなければならぬ役割を振り当てられているのである。そして、この認識者たる本多がいなければ、主人公の転生を証言する者は誰もいなくなり、この小説のがちりした迫持は、根底から崩れてしまうことを余儀なくされるはずなのだ。

『三島由紀夫おぼえがき』

濫澤が述べているように、本多は確かに立場的には副主人公に過ぎない。だが、清頭、勲という主人公たちの転生の「認識者」であることは、裏を返せば彼等よりも作品に必要不可欠な存在であることを示している。本多繁邦は今巻では大阪控訴院の判事である。清頭亡き後の判事としての生活は、穏やかで変化のない静かなものであった。国は二・二六事件など、着実に軍国主義に傾き始めていたが、本多の周囲には軍国主義の影響はない。

三十八歳の本多は、前巻における感情より理性で動くという性格は健在だが、清頭の死とともに彼の内なる情熱は尽きていた。「本多の記憶のうちで、夢と現実との罅はあいまいになり、唯一つの形見の夢日記の、清頭の手跡の確証をたよりにすれば、清頭のかつて在った現実の存在ばかりがいやちこになった(一)」という文章からは、短いが本多の清頭を失ってからの精神の飢えや空虚が滲み出ている。本多もまた、清頭の死によって、死というデカダンスの領域に墮ちたのだ。井上の言葉を借りるならば、「内面の荒廃、枯渇、冷却、貧困化、死に犯されたもの」になっていた。このくだりは、ギリシャ神話の妻のエウリュディケを亡

くしたオルベウスを彷彿とさせる。濫澤龍彦は、綾倉聡子(「春の雪」)をウエヌス原型の一人に恋する女、本作の勲の恋人である鬼頭槇子をデメテル原型の母親的な女として「彼女たちが純粹な行動に赴く男たちにとって、邪魔な存在であることに変わりはない」とネガティブな存在としている。清頭は、「春の雪」において聡子との道ならぬ恋が原因で死に至ったが、本多の精神を夢と現の狭間に彷徨わせるといふ面においては二人の女と同様である。本多もまた清頭という友人であり、恋人にも似た存在に翻弄され、輪廻転生という渦に墮ちていくという意味では二人と同類なのだ。

大神神社の奉納試合に招待された本多は、水垢離をとるために向かった滝で勲の脇に三つの黒子と清頭の面影を見出す。

群がる謎に惑ひながらも、一方では、本多の心には、しみだす地下水のやうな欲びが生じた。清頭はよみがへった！あの生半ばに突然伐られた若木は、ふたたび緑の葉を萌え立たせた。二人の友は二人ながら若かつたが、今では本多は若さを失ひ、友は依然若さの端緒にかがやいてゐる。(一八)

清頭がもう一度若く蘇って自分のもとに戻ってきた、この思いを胸に本多は清頭の生と勲の転生の意味が何なのかを考え始める。これが、本多の「行為者」としての覚醒の瞬間であり、非日常へ没入する日々への幕開けだった。

勲は理想の世界に生きながら時代の世相という現実を身にまとい、本多は輪廻転生や神話的な幻想を身にまとう表裏一体の合わせ鏡のような役割をこの時点で果たしていたのである。

理想と現実の狭間

昭和の神風連として「純粹に死ぬ」という勲の理想の実現の過程は、陸軍の堀中尉の手助けを得て同じ志を持つ友人や研究会の仲間たちとの綿密な計画を立てていたものの少しずつ驕りが見え始める。

勲の「純粹に死ぬ」理想が崩れるきっかけは、靖献塾の父の弟子の一人である佐和の告白からだった。佐和は、勲が大人になるためという親切心から父である飯沼が経営する靖献塾の資金を強引な手段で手に入れたという塾の内部事情と決起で殺害する予定だった政治家蔵原が靖献塾の秘密のパトロンだとほめかし、勲に蔵原の殺害を阻止させようとする。勲は佐和の打ち明け話に怒りと焦燥を覚えるが、それは次のような理由からであった。

思へば蔵原をよく知らぬといふことこそ、勲の行為を正義に近づけるものだった。蔵原はなるだけ遠い抽象的な悪であるべきだった。恩顧や私怨はおろか、その生の人間に対する愛憎すら希薄なところ、はじめて殺人が正義になる根拠があつた。彼はただ遠くから、その悪を感じるだけで十分だったのである。(二十一)

ここで明確になるのは、蔵原に絶対悪の権化として確固たる存在でいてほしいという願望と大人になりきれない臆病さである。清頭が聡子への恋情を自覚し、愛を形にしようという強さに目覚めたのとは対照的である。勲は肉体面の強固さでは清頭よりもずっと勝っていたが、認識する強さには欠けていた。理想と現実の狭間を知ったことにより、勲の理

想の「純粹」は驕りを見せ始めたのである。

その後、勲は悪のばねを借りてでも「純粹」さを守ろうと真杉海堂の研究会に参加した際に神域の雉子を殺す事件を起こし、父から「お前は荒ぶる神だ。それにちがいない(二十三)」という言葉突きつけられる。父親には批判されたものの、勲の驕りを見せた理想を神域を侵すという悪の「行為」から「純粹」さを見出すことよって一旦立て直すことができた。道徳的には悪でも勲にとっては彼自身の善のために必要不可欠な「行為」だったのである。

一方で、勲と再会した本多も知る「行為」によって、ある事を認識していた。

転生の認識

本多は、勲から「神風連史話」を借りてから、勲のことを案ずる日々を送り、勲と再会するまでに二つのことを認識する。(十九)で本多は、能の「松風」を観劇中にシテの役者の舞から清頭の幻が現れ、勲の幻影が現れると二人が同じ舞台上で踊る幻影を見出す。この能の幽玄さを借りた幻想的な描写からは、勲の思想と実際に知り合っただけのような人物か「知る」ことよって、清頭の転生と思われる存在としてだけではなく勲を認識したことがわかる。二人が踊った幻影を通して、勲を本多は改めて一個人として認識したのである。

そして、もう一つは前半のクライマックスの一つである勲が清頭の転生であるという認識だ。本多は真杉海堂の研究会で神域の雉子を殺した勲と再会し、「お前は荒ぶる神だ、そうにちがいない」という清頭の夢日記に書いてあった通りの出来事に遭遇し、清頭の勲への転生が「理知

の力を尽しても否み得ないもの」、事実になったことを認識する。それまでの本多は、勲と出会った滝と黒子で勲が清頭の転生であるという可能性を見出ししていたが、夢日記の予知夢の実現を目で見て知る「行為」によって、輪廻転生を認識した。

勲は神域を犯す悪の「行為」で自分のアイデンティティを立て直す事によって、本多は勲を一個人として認識し察することと勲が清頭の転生と認める「行為」によって二人が「行為者」になる準備は整ったのである。

第二部 二人の「行為者」の立場の逆転

行為者兼認識者

まず、始めに「行為者」として行動したのは勲だった。雉子殺しによって「純粹」を立て直した勲は、堀中尉が離脱した昭和神風連に佐和を仲間に加え、恋人の槇子に別れを告げてクーデターを実行しようとするが、未然に終わる。クーデターを実現する「行為者」になろうとしたが、この段階では実現できなかった。

勲は逮捕されてからいくつかの夢を見るようになる。一つは蛇が勲の脛を噛む夢、もう一つは彼自身が女になった夢である。夢を通して死とは何か、「男であるとは、不断に男であることの確証を要求されること」であり、今日は昨日よりもさらに男らしく、明日は今日よりもさらに男らしくなる「こと」、「はじめから女であり、永遠に女である(三十三)」ことを認識する。この二つの夢の出来事は、「暁の寺」において実現す

るが、このことにおいては言及せずにおく。この夢を通して認識する箇所は、次巻の伏線としてだけでなく、死と性が混在したエロティシズムが漂う。

それまでの勲にとっての夢を見る「行為」とは、「純粹」に死ぬことへの願望唯一だった。しかし、獄中における夢を見る「行為」では今まで目を背けていた自分を知っていく。神風連の英雄達のように「純粹」に死ぬことしか考えていなかった勲は、皮肉にも夢を通して、剣の使い道だけでなく、死と性という概念を覚えた。外で何かを知ろうとしなかった勲は、こうした夢から知ること、考えることを覚えたのだ。

さらに、裁判では勲側の証人となった槇子を守るために「己の「純粹性」を犠牲にし、槇子の意見に同意する。本多曰く「大人の知恵」を覚えた。しかし、彼にとってこの行為は、「純粹」というアイデンティティを壊すことに他ならなかった。裁判の証人の様子を見る「認識者」の立場となった勲は、認識者として認識する「行為」をアイデンティティを犠牲にせざるを余儀なくされたのだ。

認識者兼行為者

本多が勲と深く関わる「行為者」となる機会は十二月一日に勲が仲間とともに逮捕されたことによって突然訪れる。それまでも「神風連史話」を借りたり、真杉の研究会における事件など細々と交流はあったが、勲の無罪証明のため彼の弁護人となったことから初めて大きく関わることになった。「清頭を救はうとして救ひえなかつたことが、彼の最大の遺恨であったのなら今度こそは救はねば(三十一)」という清頭への悔恨の念、そして、勲の起こした事件によって「本当の成熟の意味」を知っ

た本多は勲を救おうと飯沼や聡子の元許婚だった洞院宮に拜謁し、勲の減刑に奔走する。この勲のために奔走する本多の「行為」は前巻の清顕と聡子のために隠密に加担する行為とどこか重なるが、聡子への恋情を自覚し、恋に奔走しかつての清顕の姿ともオーバードラップする。

本多の消えかけた情熱は勲によって新しい情熱に昇華し、より成熟したもとして生まれ変わった。勲の減刑に奔走する「行為」によって、認識者兼「行為者」という新しい形の「行為者」というスタイルが確立した。そして、「暁の寺」の主人公としての準備段階もここで整えられたのである。

「純粹」の崩壊

本多たちの尽力によって釈放された後、勲は父が逮捕を命じた張本人であること、塾が新河男爵の援助を受けていたことを聞かされる。勲は父によって現実の大人の汚さを思い知らされる事になる。飯沼にとってはその「行為」は勲に一人前の大人として現実を受け止めてほしいという親心からだった。だが、勲にとってそれは何より耐え難いことだった。

「僕は幻のために生き、幻をめがけて行動し、幻によって罰せられたのですね……どうか幻でないものがほしいと思ひます」

「大人になればそれが手に入るのだよ」

「大人になるより、……さうだ、女に生まれ変わったらいいかもしれません。女なら、幻など追はんでいいでせう、母さん」(二十八)

この時点で、勲の「純粹」というアイデンティティは完全に崩壊する。勲の仲間と神風連の英雄のように「純粹」に男らしく、正義を全うして死ぬという理想はもう戻ってこないからだ。飯沼や佐和の勲の大人になるための手助けは勲の「純粹」を粉々に破壊してしまったのだ。

たしかに二・二六事件の挫折によって、何か偉大な神が死んだのだった。当時十一歳の少年であった私には、それはおぼろげに感じられただけだったが、二十歳の多感な年齢に敗戦に際会したとき、私はその折の神の死の怖ろしい残酷な実感が、十一歳の少年時代に直感したものと、どこかで密接につながっているらしいのを感じた。

「二・二六事件と私」

三島は二・二六事件と敗戦によって「何か偉大な神が死んだ」と述べているが、勲の場合の「何か偉大な神」の死は、神風連の英雄のようにという「純粹」であろうとする理想の死であった。飯沼の大人になれば手に入るというものは、地位や名誉、恋愛など物質的なものを指している。しかし、勲にとってそれらは無意味そのものである。すべてが幻と知ってしまった時点で、勲の理想は死んでも当然だった。神風連の英雄のように「純粹」に男らしく正義を全うして「純粹」に死ぬという理想も、理想を追い求めた嘗ての自分もこの時点で死を迎えた。

さらに、共に釈放された佐和から勲は楨子が勲を自分が安心できるよう密告した事を聞かされる。男と女のジェンダーの認識の違いに関して齋藤環^⑨は、「男と女の最大の違いは、「所有」と「関係」の違いである」と述べているが、本作ではむしろ「所有」しようとしているのは楨子の方が近く、男と女の位置が逆転している。楨子の屈折した愛の狂気を自

分の目に届くよう監視する行為は、「所有」に値する行為そのものだからだ。最愛の女にも裏切られた勲は最後の誇りを守るため、蔵原を殺害し、死に至る。勲の行為はすでにこの時点では、理想を全うするものではない。この行為が意味するのは「純粹」であった頃の自分への未練であり、弔いなのだ。

勲が獄中で学んだ「知る」という行為は人間が現実を知り、自らが何者かである事を見つめていく大人としての成長に近づく「行為」であったが、「知る」という行為は純粹であるべきという勲の思想から外れていたため理想を守るために大人になる事を拒否し、死を選び、理想を持たない女に転生する形を選んだのだ。

この時点で本多の「行為」は勲の死という形で終わるが、次巻で勲の意識を持つジン・ジャンに出会い、転生の神秘に遭遇し、主人公としてジン・ジャンに翻弄される立場に勲と立場が逆転する。結果的に本多は勲のアイデンティティの崩壊と死によって、真の意味での転生を見届ける傍観者兼「行為者」となったのだ。

二人の「行為者」は立場が逆転する合わせ鏡のような役割を作品上で果たす形になったのだ。

考察

飯沼勲は「純粹」に死ぬというアイデンティティから新雪のような印象を持たせる青年だった。彼は行動の上ではある意味「行為者」になれたが、精神面ではアイデンティティの崩壊を余儀なくされた。勲は本作で人間が大人になる過程で失う幼い日の幻を死という犠牲で体现する役目を担っている。一方、本多は形は違いますが情熱を取り戻した。皮肉だが、

勲の死という形で輪廻転生を認識し、魂の行方に翻弄される主人公に代わる「行為者」となった。二人は正反対の末路を辿ったが、勲の「行為者」としての役割は本多に継承されることで形に残ったのである。

注

- (1) 佐藤秀明「ある「忠誠」論―「昭和七年」の「奔馬」」(『三島由紀夫研究 1』鼎書房、2007年)
- (2) マルグリット・ユルスナール『三島由紀夫あるいは空虚のヴィジョン』(河出書房新社、1995年)
- (3) 井上隆史『三島由紀夫 虚無の光と闇―三島由紀夫論集』(試論社、2006年)
- (4) 三谷太一郎『日本の近代とは何であったか―問題史考察』(岩波新書、2017年)
- (5) 三島由紀夫『英霊の聲』(河出書房新社、2005年)
- (6) 澁澤龍彦『三島由紀夫おぼえがき』(中公文庫、1987年)
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 注(5)に同じ。
- (9) 斎藤環『関係する女 所有する男』(講談社現代新書、2009年)

※本稿での「奔馬」の引用はすべて「決定版 三島由紀夫全集13」(新潮社、2001年)に拠った。